

使徒言行録 16 章 1-15 節

「神の偉大なご計画」

今日からパウロの第二回宣教旅行が始まります。この旅行の出発に際してパウロは、同僚であったバルナバとの対立による別れという悲しみを体験しました。しかしその途上で、テモテとの出会いが与えられます。テモテはパウロの助手となり、パウロのもとで、キリストの福音を宣べ伝える伝道者として育てられていったのです。テモテとの出会いは、バルナバとの別れによる悲しみを癒し、新たな力、勇気を与えてくれたに違いありません。

そしてパウロたちは熱心にキリストを証し、福音を宣べ伝えていました。しかし、「アジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられた」のです。さらにビティニア州に入ろうとしたが「イエスの霊がそれを許さなかった」とあります。「イエスの霊」は聖霊と同じことです。ここでも、神がお許しにならなかったのです。パウロは途方に暮れたことでしょう。やろうとしていたことが次々とうまくいかない。あとから考えると、「あの時うまくいかなかったのは、神様の別の計画があったからだ」と分かることがあります。しかし、うまくいかないことが度重なる時、混乱して、深く悩みます。パウロが、病の中にあつたとしたら、余計、彼の苦しみは深かったことでしょう。一方で、クリスチャンは、「神のご計画」とか「神の御心」ということを言います。神はその偉大なご計画の中で、さらにご自身のまったく新しいご計画を示されると。神の御心・ご計画を知るということは、段階を踏む場合があるということです。トロアスまで行く前に、なぜガラテヤあたりで示されなかったのか、せめてビティニア州に行く前に示してくださったら良かったのに、とも思います。なぜかは分からないけれど、自分の思惑からどんどんと離れていく状況の中で、ようやく知らされる御心というものがあります。しかし、逆にトロアスまで来たがゆえに、すぐに「確信するに至った」のです。そのような信仰の歩みもあります。

さて、パウロが見た幻にはマケドニア人が出てきました。ここからパウロはヨーロッパに足を踏み入れることになります。キリスト教にとって大きな転換点です。パウロの頭にはヨーロッパはありませんでした。神のご計画はパウロという一人の伝道者の宣教計画をはるかに飛び越え、もっともっと大きなスケールで進んでいたのです。エーゲ海を渡って彼らが先ず行ったのは、フィリピでした。このフィリピにおける伝道で、リディアが信仰を与えられます。信仰とは、神様によって心を開かれて、主イエスによる救いの恵みを見つめることなのです。パウロが、自分の思いや計画の変更を余儀なくされ苦しみや挫折の中で、マケドニア人の幻を示された時に体験したのもそういうことだったでしょう。失敗や挫折、思い通りにならない現実を嘆いていた彼が、主によって心を開かれることによって、自分の前に主の備えて下さった広い道が開かれていることに気づいたのです。わたしたちの目には道がないように見えるときも、神は目を開いて下さり、聖霊の導きによって、救いへ、神の国へ、希望へと向かう道を指し示して下さい。神の愛と恵みを知らされつつ、神と共にある喜びの中で、神に従い、神の道を歩んでいきたいのです。